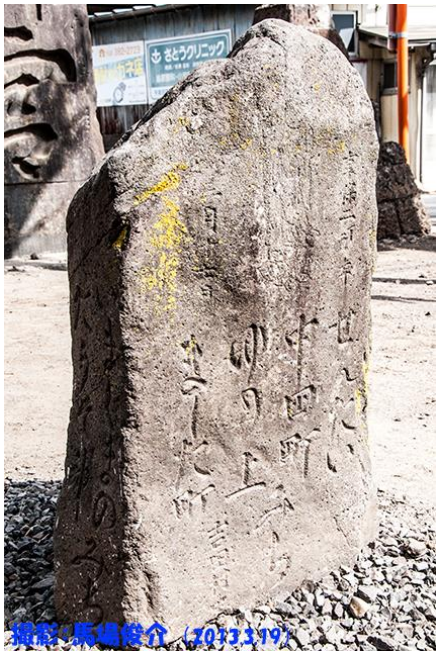
宮城県

街道１

宮城県を代表する街道は、陸奥上街道（大崎市、江戸期、国史跡）B で、五街道の一つであった奥州街道より成立は古い。中でも、松尾芭蕉の紀行文集『おくのほそ道』でも触れられた千本松長根が有名である。尾根沿いの松並木は戦時中に伐採されたが、前後の坂道には石畳が見られ、特に西側の石畳はオリジナルに近い形で修景整備されている。

街道２

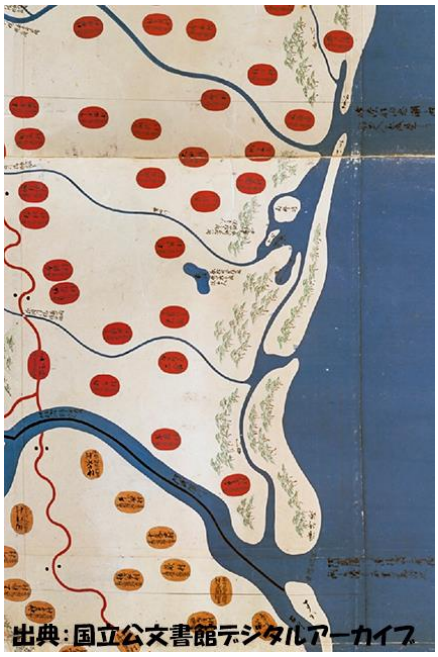
仙台市内にも多くの道標があるが、全国的にも珍しい道標として、高舘川上の延命地蔵道標（名取市、享保 2（1717）、市登録）A を紹介したい。正面上部に延命地蔵菩薩立像が線刻され、５つの面をもつ自然石のすべての面に道案内が刻まれている。



舟運１

宮城の運河といえば貞山堀が有名だが、この名称は、北上川から阿武隈川までの全長 32.5 キロの大運河が開削・改修された明治 17 に、宮城県土木課長早川智寛により伊達政宗の法号の一部をとって命名されたものである。江戸時代の名称は、最初に開削された名取川～阿武隈川間が木曳堀〔内川〕（名取市・岩沼市、慶長 6（1601）以降）A であった。しかし、木曳堀については、分からないことが多すぎる。

東日本大地震前までの定説は、慶長 5（1600）末の仙台城縄張りに続き仙台城下の建設が始まるが、その資材調達のため阿武隈川流域の木材を運ぶための運河が造られ「内川」と名付けられた、とするものである。建設の担い手としては川村孫兵衛が想定され、孫兵衛が仙台藩に仕官する慶長 6（1601）以降に着手されたと考えられていた。その根拠として、正保年間（1644-48）に作られた「奥州仙台領国絵図」に「内川」が描かれている点をあげているが、同時代資料で着工を明示した記録はない。東日本大地震後に提起された新説では、慶長 16（1611）の慶長三陸地震津波に焦点を当てている。現在の名取市・岩沼市に該当する地域の海岸沿いに大きな被害を与えたという点では、２つの地震による津波はよく似ている。そこに着目して、①内川の海側を川村孫兵衛が元和年間（1615-24）に塩田化した、②海岸に平行に運河を開いたのは津波後で、一種の防災対策である、③「元禄国絵図」（1696-1702）に登場する運河沿いの松並木は津波対策である、などと指摘された。また、「内川」という名称は「天保国絵図」（1835-38）でも使われているが、「阿武隈川絵図」（1855）では「木ヒキ堀」と記されている。古文書では「渡辺家文書目録」（1786）で場所不明だが「木引堀」との記載がある。以上を総合して、以下の



点を強調しておきたい。(a)仙台城下の造成にあたり名取川を物資の運搬に用いた可能性は高いが、阿武隈川～名取川間を海上輸送とせず、わざわざ海に平行な運河を開削した理由が従来の説では弱い。むしろ、運河でなく新田開発用の排水路だった可能性が高い（「内川」という名称もぴったり）。(b)川村孫兵衛が造ったという確証がないのに「孫兵衛ありき」で仮説が展開されている。(c) 慶長 16 の津波後に海に平行に水路を造ったという説は、水田の塩抜きには必須な対策であることから説得性は高いし、「内川」という名称もそれをある程度裏付けている。水路には不要な松並木を早い段階から植えている点は、「将来」の津波対策用と考えるとよく理解できる。(d)城下町の拡大に伴い、四代藩主・伊達綱村が城下と塩釜を結ぶ御舟入堀（1673）を開削するが、こちらは平行水路ではなく、ショートカット水路なので、木曳堀とは性格が全く異なっている。

下の対比写真は東日本大地震前後の松並木で、本数は半減したが往時を偲ぶことはできる。

舟運２

寒風沢の方角石（塩竈市、天保 12（1841）、市有形）B は、東北の太平洋沿岸で唯一というだけでなく、全国的に見ても高さ 85cm、直径 45cm と大型で、外縁に十二支、内部に東西南北、中央に北向き矢印が刻まれている保存状態も最良、奉献者が船頭・廻船問屋とは異なり、幕府より差遣された役人という点も特異である。

農業１

品井沼潜穴（元禄潜穴）（松島町、元禄 11（1698））A は、江戸期を代表する農業排水用の長大トンネルである。面積 1800ha もあった広大な品井沼の水を松島湾に排出し、かつ、鳴瀬川の逆流を防いで水害をなくし、品井沼に新しく「水田」を開くことを目的に造られた排水路で、途中に長さ 2578m，幅 3.6m，高さ 2.4m のトンネルが 2 本平行して掘られた。総指揮者は仙台藩士・大越喜右衛門で、平地部の長大トンネルだったため、途中に 10 ヶ所の竪穴を掘り、竪穴と竪穴の間に横穴（潜穴）を掘るという手法が採択されたが、高低差がわずか 1.6m しかないため難工事となった。穴頭は洋風の煉瓦坑口に改修されたが（明治 31）、穴尻はそのままの形で残っている。

農業２

仙台市の市街地の中に残る杉土手（仙台市太白区、江戸中期以前）B は、東西約 6.4 キロにわたり、名取川から広瀬川までの丘陵麓に築かれていたと推定される鹿除け土手である。こうした猪垣が山間部に残っている事例は数多いが、市街地内は珍しい。

防災１

米谷の蛇行部（登米市、元和 2-9（1616-23））A は、江戸初期に集中して実施された北上川の治水事業を代表する事例である。伊達正宗の命を受け、重臣であった登米伊達氏の初代当主・伊達宗直が実施した北上川の一期目の改修事業の要となった工事で、北上川が仙北平野に出た直後に S 字型の蛇行部を人為的に造り、流速を落とし水深を確保しようとしたと推測されている（舟運路を開くことが目的）。下の合成写真は、S 字の屈曲点から見た全景である。

防災２

名取川右岸の閖上土手の松並木（名取市、江戸中期、市天然）B は、典型的な防風・防潮林で、仙台藩により、城下と閖上浜を結ぶ名取川堤防沿いに植えられたもの。樹齢 230～240 年の黒松 48 本が堤防上に見事に残っている。東日本大地震前後の比較写真でも、周辺を含めた防災に役立ったことが分かる。

防災３

味ヶ袋の大禹之碑（加美町、文久 2（1862））C は、味ヶ袋地内が洪水に悩まされていた頃、減災を祈念して建立された石碑で、正面に「大禹之碑」と刻まれている。禹王は、古代中国の伝説上の治水の名君で、中国同様に温帯モンスーン地帯にあって治水と向き合ってきた近世日本でも崇拝され、各地に禹の名を入れた碑が建てられた。